

旭日、遥かなり3

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

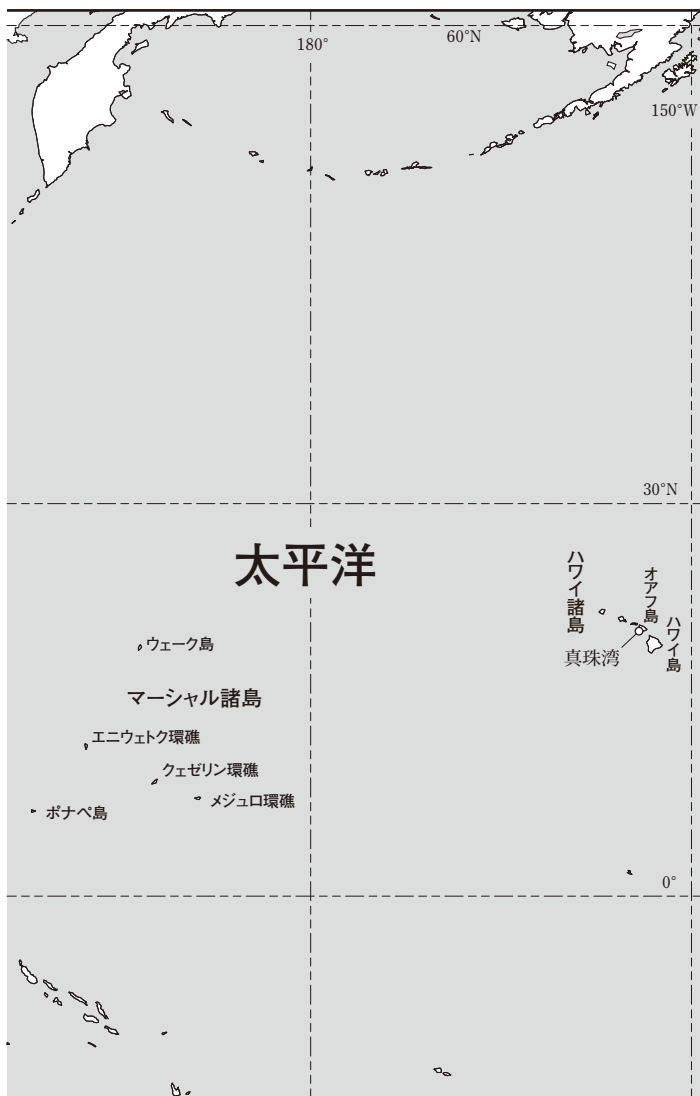
地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

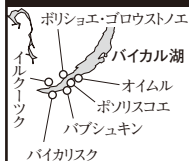
目次

第一章	太平洋艦隊の行方	9
第二章	環礁の攻防	31
第三章	ユーラシア大同盟	59
第四章	高速雷撃	87
第五章	翻 ^{ひるがえ} るZ旗	135
第六章	バイカル湖の巨鯨	231

太平洋



西部太平洋要図



旭日、遥かなり 3



第一章 太平洋艦隊の行方

1

昭和一七年三月二四日早朝、マーシャル諸島クエゼリン本島より発進した第六根拠地隊隷下の零式水上偵察機は、同島の南東三〇〇哩の空域を通過しつつあった。

クエゼリンの航空基地は、米艦隊の攻撃で大損害を受けたため、現在は水上機のみが活動している。

この日の索敵目標は、マーシャル諸島の東端に近いメジクロ環礁だ。

機長と操縦員を兼任する岸川則夫中尉は、周囲の空と計器盤を絶えず見つめており、偵察員の太田孝一等飛行兵曹は、航法の計算と周囲の見張りに余念がなかった。

「機長、メジクロまで五〇哩です」
「そろそろ危険空域だな」

太田の報告を受け、岸川は周囲の空を眺め渡した。

この四日前、クエゼリン環礁ルオット島の北方海上で、「クエゼリン沖海戦」の公称が定められた大規模な機動部隊同士戦いが生じた。

日本軍はこの戦いに勝利を収め、来寇した米機動部隊を撃退した。

連合艦隊司令部は、機動部隊同士の海空戦に引き続いて、米太平洋艦隊との決戦が始まるものと考え、第一艦隊をトラック環礁とクエゼリン環礁の間海域に進出させた。

第一艦隊は、竣工してから日が浅い最新鋭戦艦の「大和」を除いた、帝国海軍の全戦艦を擁しており、連合艦隊司令長官山本五十六大將が陣頭指揮を執っている。

日露戦役の帰趨を決定づけた日本海海戦以来の大規模な艦隊決戦が、間もなく始まる。

誰もがそう信じ、戦意を滾らせていたが、予想に反し、米太平洋艦隊主力は姿を現さなかった。

連合艦隊は、クエゼリン環礁を中心に索敵機を飛

ばして搜索に当たったが、米艦隊がその網にかかることはなかった。

敵の主力は、忽然と姿を消してしまったのだ。

連合艦隊は、米艦隊が西進してトラック環礁を襲う可能性や、ウェーク島の奪回を図る可能性を考え、トラックやウェーク島の周辺も搜索したが、戦艦や空母はおろか、駆逐艦一隻すら発見できなかった。

「米艦隊は、機動部隊同士の戦闘に敗北したため、撤退したのではないか？」

連合艦隊司令部や第六根拠地隊司令部には、そんな意見もあったようだ。

だが、連合艦隊の参謀の一人が、

「大艦巨砲主義者のキンメルが、機動部隊戦に敗北したとの理由で撤退するとは考え難い。米軍は、マールシャル諸島のどこかに仮泊して、燃料、弾薬の補給と損傷艦の応急修理を実施した後、改めて決戦を挑んで来るのではないか」

と主張したため、日本軍はなおも索敵を続けた。

三月二三日、トラックから長距離索敵に向かった九七式大型飛行艇のうち、二機が未帰還になるという事件が起きた。

二機とも、夏島を基点に九〇度から一〇五度の索敵線を担当していた機体だ。

整備不良に伴う故障や悪天候に巻き込まれての事故も考えられるが、両機は無線を発することなく消息を絶っている。

また、二機が受け持っていた索敵範囲内には、マールシャル諸島南東部のメジロ環礁が含まれる。

トラックからは一二〇〇哩、クエゼリンからは三五〇哩と遠いため、戦略上の価値は小さいと判断され、守備隊を駐留させなかった地だ。

「トラック、クエゼリンから遠いということは、我が軍に発見されることなく、補給や修理を実施できることを意味する。米太平洋艦隊は、メジロに仮泊しているのではないか」

そのような声が連合艦隊司令部に上がり、比較的

メジロに近いクエゼリンから、あらためて索敵機が飛んだのだ。

零式水偵は、翼内に六個の燃料タンクを持つ。

全てを満たしたときの航続距離は一八〇〇哩。クエゼリン―メジロ間の往復は充分可能だが、最大時速は三六一キロと遅い上、防御火器は電信員席の七・七ミリ旋回機銃一丁だけだ。

敵戦闘機に襲われたら、ひとたまりもなく撃墜される。

索敵を成功させ、生還するためには、細心さいしんの注意を払わねばならない。

「高度〇三マルサン（三〇〇メートル）まで降りる」

岸川は、二人の部下に宣言するように言った。操縦桿そうじゅうかんを前方に押し込み、機首を下げた。

全長一一・五メートル、全幅一四・五メートルの水上機が降下に入り、海面がせり上がる。

高度が下がれば空気抵抗が増大し、燃料消費が増えるが、燃料はまだ七割以上を残している。

多少燃料消費が増えても、帰路に燃料切れとなることはないはずだ。

高度計の針が三〇〇メートルを示したところで、

岸川は零式水偵を水平飛行に戻した。

海面は、これまでとは比べものにならないほど近い。風に碎くだかれる波頭なみがしらが、はつきり見える。

「敵の目をごまかせるかどうか、だな」

口中で、岸川は呟つぶやいた。

未帰還となった二機の九七大艇は、敵戦闘機の奇襲を受け、無線を打つ間もなく撃墜された可能性が高い。

高度三〇〇メートルの低空飛行であれば、敵機に発見される確率は小さいが、敵の探知網をぐぐり抜けられるかどうかは分からなかった。

「左前方に艦影！」

高度を下げてから五分ばかりが経過したとき、太田が緊張した声で叫んだ。

コクピットの空気が、一瞬で張り詰めた。

司令部が予想した通り、やはりメジユロに敵艦隊がいたのだろうか。

岸川は右手で操縦桿（あやつ）を操りつつ、左前方に双眼鏡を向けた。

報告された艦影を、視界に捉えた。

哨戒中の駆逐艦か、あるいは駆潜艇（くせんてい）、哨戒艇と
いった小型艦艇か、と予想したが、どちらでもない
ようだ。

「地元民の漁船だろう」

岸川は、その判断を口にした。

火器らしきものが全く見当たらないこと、船全体の
形状が単純であることから、そのように結論づけ
たのだ。

漁船なら、米艦隊に通報される心配はない。

今のところ、日本機がメジユロに接近しているこ
とは、敵に知られずに済んでいる。

左前方に見えていた漁船が、左正横（せいおう）へ、更（さら）には後
方へと移動し、視界の外に消える。

零式水偵は、海面から三〇〇メートルの低空を、
メジユロへと向かってゆく。

（もしや……）

ある疑惑が、岸川の脳裏（のうり）に浮かんできた。

帝国海軍は、内地の漁船を乗組員（ちようよう）ごと徴用し、
特設監視艇（とくせつかんしてい）として、本土近海の哨戒に使っている。

米軍も、メジユロに住む漁師を徴用し、哨戒に使
っているのではないか、と考えたのだ。

だが岸川は、すぐにその疑惑を打ち消した。

米国は、日本よりも遥かに豊かな国だ。洋上哨戒
には、駆逐艦か哨戒艇を用いるはずだ。

現地民の漁船を徴用するなどという真似（まね）は、米国
にはそぐわない。

メジユロに近づいたため、神経が過敏（かびん）になってい
るのだろうか……。

「メジユロまで三〇浬」

太田が、航法のチャートを見ながら報告する。

マーシャル諸島の南東部にある巨大な環礁は、ま

だ視界に入つて来ない。

前方に見えるものは、広漠たる大海原と波のうねり、白い波頭だけだ。

「戦闘配置」

岸川は、第二の命令を出した。

電信員の財部八郎二等飛行兵曹が後ろを向き、

七・七ミリ旋回機銃を構えた。

命中率は良好とは言えず、破壊力も小さいが、ウエーク沖海戦、クエゼリン沖海戦では、F4Fを撃墜した事例も報告されている。敵戦闘機が後方から襲つて来れば、一矢報いることは可能だ。

零式水偵は、高度三〇〇メートルの低空を飛び続ける。眼下の海面は急流の勢いで、後方に吹つ飛んでゆく。

陸地はまだ見えず、敵艦も、現地民の漁船も、視界には入つて来ない。

ただ、メジユロとの距離が縮まるに従い、危険が迫っていることを感じていた。

「メジユロまで二〇浬」

太田がそう報告したとき、右前方に小さな黒い点が見えた。

「右二五度にメジユロ！」

岸川は伝声管を通じて、二人の部下に伝えた。

黒い点が左右に広がり、点から線へ、更には環礁へと形を整える。

零式水偵は、環礁の北に回り込む。

岸川は、環礁と周囲の空に視線を向ける。

メジユロが視界に入った今、米軍もまた零式水偵を視認した可能性が高い。

敵を早期に発見し、いち早く避退行動に移ることが、岸川自身も含めた搭乗員三名の命を救うのだ。

メジユロが、更に近づいて来る。

南北に狭く、東西に長い。鉤を思わせる形状だ。西側は暗礁が多く、艦隊の泊地には適さないが、

東側は十分な水深があり、礁湖の面積も広い。

敵がメジユロを占領しているのであれば、環礁の

東部に仮泊している可能性が高い。

(いるか、いないか)

岸川が環礁の東側を注視したとき、

「左後方、敵機！」

伝声管から、財部の声が飛び出した。

岸川は、咄嗟に操縦桿を左に倒した。

零式水偵が左に傾き、大きく旋回した。

環礁が右に流れ、視界の外に消えた。

直後、青白い火箭が機首の右上方を流れた。

ずんぐりした胴体を持つ敵機が二機、猛々しい爆

音を轟かせ、右上方から岸川機を追い抜く。

グラマンF4F、ワイルドキャット。米海軍の

主力艦上戦闘機だ。太平洋艦隊に随伴している空母

から発艦した機体であらう。

F4Fが、一旦岸川機と距離を置く。

水平旋回をかけ、左前方から向かって来る。

零式水偵は九七艦攻と同じく、正面の武装を持た

ない。前方から来る敵機に対しては、回避によつて

かわす以外にない。

岸川は、再び左の水平旋回をかける。

右の翼端が跳ね上がり、機体が急角度で傾斜し、

左に旋回する。

F4Fの両翼に発射炎が閃き、青白い火箭が噴き

延びる。

不気味な打撃音と共に衝撃が走り、機体が震える。

何発かが、擦ったようだ。

後席から連射音が届き、火箭が右に噴き延びる。

財部が、七・七ミリ旋回機銃を発射したのだ。

岸川は命中を期待するが、真つ赤な曳痕の連なり

が伸びた先には、F4Fはいない。

「太田、財部、無事か?」

「太田、無事です!」

「財部、無事です!」

岸川の呼びかけに対し、二人の部下が応答する。

「財部、司令部宛打電! 『我、敵機ノ攻撃ヲ受ク。

位置、(メジユロ)上空!』」

岸川は、早口で財部に命じた。

F4Fから逃げ切れる可能性は乏しい。敵機と交戦したただけでも報告しなければならぬ。

「『我、敵機ノ攻撃ヲ受ク。位置、〈メジユロ〉上空』。司令部宛、打電します!」

財部が早口で命令を復唱したときには、F4Fは後方から迫っている。

岸川はみたび、左の水平旋回をかける。

胴体下に二基のフロートを下げた水偵が、急角度で機体を傾け、空が右に、海面が左に来る。

旋回する水偵の主翼や胴を、F4Fの射弾がかすめ、前方へと流れ去る。

一連射を放ったF4Fが、猛速で岸川機を追い抜いてゆく。

岸川が機体を水平に戻したときには、F4Fは反転を終え、正面から向かって来る。

「くそつたれ!」

岸川は罵声と共に、操縦桿を前方に押し込んだ。

心情的には射弾を叩き込みたいところだが、正面に兵装がない以上、如何ともし難い。

F4Fの両翼に、発射炎が閃く。無数の青白い曳痕が奔流の勢いで、岸川の頭上を通過する。

F4Fは左右に分かれ、零式水偵とすれ違う。

岸川は、右に旋回する。フロート二基を下げた機体が大きく傾斜し、右へ右へと回ってゆく。

メジユロ環礁が視界に入った。

仮泊している多数の艦影が、はつきり認められた。「いた!」

その叫びが、口から漏れた。

米太平洋艦隊は、やはりメジユロにいた。

マーシャル諸島の一角を、占領していたのだ。

「財部、司令部宛打電。『敵艦隊、〈メジユロ〉二有リ!』」

岸川は、大声で命じた。

復唱が返されるよりも早く、F4Fが襲って来た。打撃音が続けざまに響き、先の被弾時とは比較に

ならない衝撃と振動が、続けざまに襲つて来た。

(やられた！)

岸川は、顔面から血の気が引くのを感じた。

エンジン・カウリングと胴体の合わせ目付近から、白煙がなびいている。

出力が低下し、速力が衰えて^{おとしろ}いる。

被害は、エンジンだけに留^{とど}まらない。

左主翼の補助翼が吹っ飛び、中央に複数の孔が穿^{うが}たれている。

「財部、打電したか？」

「財部二飛曹戦死！」

太田から返された報告に、岸川は思わず呻^{うめ}いた。

米太平洋艦隊主力がメジエロにいるとの報告は、まだ打電されていない。

岸川機は、最も重要な任務を果たせていないのだ。

「後方より敵機！」

太田が絶叫した。

直後、新たな衝撃が襲いかかり、金属的な叫喚^{きようかん}

が響いた。

咄嗟に振り向いた岸川の目に、全体の七割近くをもぎ取られた左主翼が映った。

左の揚力^{ようりよく}を失った零式水偵が、機首を大きく下げ、錐^{きりも}揉み状に回転し始める。

低空を飛行していたため、墜落までの時間は短い。みるみる海面が迫つて来る。

(畜生、畜生、畜生——！)

最後の数秒間に、その言葉だけが岸川の脳裏を駆け巡った。

ごく単純な繰り返しに、眼前に迫った死への恐怖と、最も重要な情報を遂に送り得なかった無念の思いがこもっていた。

岸川が生涯^{しょうがい}で最後に経験する凄まじい衝撃と共に、その思考が永久に途切^{とぎ}れた。

2

「敵一機を撃墜。機種は零式水偵と判断」

アメリカ合衆国太平洋艦隊旗艦「ペンシルベニア」の長官公室に、報告が上げられた。

「敵機は、報告電を打ったか？」

「本艦の通信室が、敵機から発信された電波を傍受しました。通信長は、ごく短い暗号電文だったと報告しています」

参謀長ウィリアム・スミス少将の問いに、「ペンシルベニア」艦長チャールズ・クック大佐が答えた。「日本軍も、我が軍がメジユロに仮泊していることに気づく頃です。『レキシントン』戦闘飛行隊は昨日、メジユロに接近して来た九七大艇二機を撃墜した旨を報告しました。F4Fは、マーヴィスが無線を打つ前に不意打ちをかけて墜としたようですが、同じ索敵線上で二機が未帰還になれば、何が起きている

か気がつくはずですよ」

「あと三日、いや二日は、我が軍がメジユロにいることを秘匿したかったところだが……」

作戦参謀チャールズ・マックモリス中佐の言葉を受け、太平洋艦隊司令長官ハズバンド・E・キンメル大將は太平洋艦隊の編成図を見つめた。

太平洋艦隊がメジユロ環礁を占領し、決戦前の仮泊地に定めてから、今日で三日になる。

その期間を、太平洋艦隊は、燃料、弾薬の補給と負傷者の後送、損傷艦の応急修理に費やした。

クエゼリン環礁の航空基地や防御陣地に艦砲射撃を加えた巡洋艦や、ルオット島沖の海空戦に参加した第八、第一二任務部隊の所属艦は、相当量の砲弾、銃弾を消費している。

日本軍との戦闘で損傷した艦のうち、損傷が大きく、決戦への参加が不可能と判断された重巡一隻、軽巡二隻、駆逐艦四隻は真珠湾に帰還を命じたが、戦艦「ワシントン」、重巡「アストリア」の二艦は

比較的損害が小さく、戦闘継続が可能だ。

キンメルとしては、少しでも良好な状態で決戦に参加させることを願っている。

特に「ワシントン」は、姉妹艦「ノース・カロライナ」と共に、合衆国海軍の期待を担う新鋭戦艦なのだ。

太平洋艦隊が伴ってきた工作艦の艦長は、

「三月二七日までいただければ、完璧に仕上げて御覧に入れます」

と報告したが、キンメルは、

「二六日まで上げて欲しい。戦況が許さないようであれば、修理途中であっても打ち切って、戦闘に参加させざるを得ない」

と言い渡している。

このため、工作艦の乗員は、昼夜兼行で「ワシントン」の修理作業に当たっている。

また、補給や修理と並行して、太平洋艦隊が伴ってきた海軍建設大隊が、環礁南部のメジュロ本島に、

応急の飛行場を建設している。

地面を平らに整地し、有孔鉄板を敷き詰めただけの代物だが、重量が軽い単発機なら運用可能だ。

補給部隊は、燃料や弾薬と合わせて、海兵隊航空部隊のグラマンF4F、ワイルドキャット、四〇機を分解状態でメジュロに運び込んでいる。

飛行場が完成し、F4Fの組み立てが完了すれば、軽空母一隻分相当のF4Fが戦力に加わる。

ルオット島沖海戦（クエゼリン沖海戦の米側公称）で三隻の空母を喪失し、稼働空母は「レキシントン」一隻だけとなった現在、四〇機のF4Fは貴重な戦力だ。

極力時間を稼ぎ、戦力を回復した上で決戦に臨みたいとキンメルは考えていた。

「トラックからメジュロまでは、約一二〇〇哩です。連合艦隊の主力がトラックから出港し、メジュロに到達するまで、約三日を要します」

マックモリスが言った。

三日あれば、損傷艦の修理は完了し、メジユロ本島の飛行場は完成している。

キンメルが望んだ通りの展開だが――。

「空襲を受ける危険はないだろうか？」

「クエゼリンの飛行場は、現在使用不能です。日本軍の基地設営部隊は機械化が遅れており、人力に頼るところが大了。クエゼリンの飛行場を、短時間で復旧^{ふっきゅう}させるのは不可能でしょう」

キンメルの疑問に、マックモリスが答えた。

「トラックから来襲する可能性は？」

スミスの疑問提起に、マックモリスが返答した。

「日本軍が保有する爆撃機は、双発機です。B17のような四発機であればともかく、双発機にトラックからメジユロまで往復できるだけの航続性能があるとは考えられません。メジユロが、空襲を受ける危険はないと判断できます」

「先に墜としたジェイクは、どこから来たのだろうか？」

スミスが、中部太平洋の広域図に視線を転じた。

マーシャル諸島を中心に、トラック環礁や日本軍に占領されたウェーク島までが含まれている。

メジユロとトラックの距離は約一二〇〇哩。単発の水上機が往復可能な距離ではない。

「クエゼリンではないでしょうか？」

航空参謀ロニー・マコード中佐が広域図に指示棒を伸ばし、クエゼリンとメジユロを交互に示した。

「ジェイクは、一五〇〇哩以上の航続性能を持つとの情報があります。クエゼリンからメジユロまでは三五〇哩ですから、往復は可能です」

第九巡洋艦^D戦隊が艦砲でクエゼリンを攻撃してから、四日が経^たっている。

日本軍はその間に、同環礁の水上機基地を、ジェイクの運用が可能な程度まで復旧させたのだろう、というのが、マコードの推測だった。

「今^{いま}一度、艦砲か航空攻撃でクエゼリンを叩いてはいかがでしょうか？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。